

三月六日(月)

昼下がりに、駅前の喫茶店でコーヒーを飲みながら、残り僅かな文庫本のペー  
ジをめくる。臍脂のスピンは、昨日読み終えたところに挟んだまま。

ランチタイムには少し遅い時間帯とはいえ、しつかりしたランチといいコー  
ヒーを淹れてくれるココの店内は、色んな年代のお客さんで賑わっている。目の  
前で古い友人の昼寝に付き合っている身としては、すっかり薄くなった頭を眺め  
ているよりは、返却期日の近い本の世界に身を投じている方が、気が楽だ。少し  
冷めたコーヒーを飲み切り、おかわりをオーダーする。

ウェイトレスが新しいコーヒーを持ってきたところで、目の前のおじさんはゆ  
っくり身体を起こし、額に上げたメガネを元の位置に戻す。その仕草ひとつひと  
つに、おじさん臭さが纏わりついている。

「僕も、おかわりもらおうかな」

彼は寝起きの顔を両手でマッサージすると、近くに来ていたウェイトレスに注  
文した。ウェイトレスは「かしこまりました」と笑顔で答え、空のカップを持っ  
て下がった。

「朋ちゃん、ゴメンね。鼻炎薬でさ」

眠くならない物にすればいいのというと、彼は、眠くならない奴は効がなく  
て、と答えた。私の読んでいる本を見ながら、運ばれてきたコーヒーを啜る。

「東野圭吾？」

「そうそう。映画になるっていうから、今度はどんなもんかと思って」

「で、どう？」

私は読みかけの本を閉じ、肩を竦める。彼は「だろうね」とコーヒーを飲んだ。  
私は文庫本を鞆に仕舞う。

「もういいの？」

彼の問いかけに、小さく頷く。最後まで読み切らずに、返却ポストへ投げ込  
もうかな……。

「沙綾がこつちに来るのは来月だっけ？ ケントは、」

首を振って答える。

「そっか。会わないまま、二十歳、か。元気にはしてるの？」

「向こうで元気に大学通ってる」

彼にしては珍しく、「ケントが大学生か、想像つかないな」と随分しみじみとした様子で呟いた。彼が健人に会ったのは、八歳の頃が最後だっけ。

「四年前の写真ならあるけど、見る？」

「いや、また会う時の楽しみに」

彼の手振りで出番を失ったスマホは、さつきまでいた鞆の中へ逆戻り。

「おっと、もう一四時か」

彼は自分の腕時計を見て、カップに残ったコーヒーを飲み干した。

「僕は戻るけど、朋ちゃんは」

私は首を振る。

「じゃあ、お先に」

彼は財布から五千円札を取り出して、私の前に置いた。そのまま流れるように、喫茶店の扉を開ける。お店の外に出た彼は窓の外から私に手を振り、株式会社〆サイズの方へ早歩きで去っていく。

私は残りのコーヒーをゆっくり楽しんでから、駅前をぶらついてバスに乗ろう。駅の向こう側に出て、イオンモールを覗いてもいい。

まだ少し肌寒いけど、だんだん春めいてきた。宇野辺までのんびり散歩して、モノレールを乗り継いで帰るのもアリか。

最後に数ページだけ残った文庫本を、もう一度鞆から取り出した。イオンモールへ行くのなら、中の図書館で返却しよう。どこまで読んだか記憶を辿りながら、「この辺りだった気がする」と手を止める。今一つ肌馴染まない物語も、最後まで見届けてあげようじゃない。